

審査所感

【 漢字作品 】

田中節山（たなか せつざん）

日展評議員 読売書法会常任理事 謙慎書道会副理事長 全日本書道連盟常務理事・事務局長 全国書美術振興会理事

今年も昨年を上回る臨書作品が寄せられました。レベルもアップし、臨書から創作へと動き出している作品が見られたのは、嬉しいことでした。

形をしっかりと捉え、線の味わいも似せたい。ここが出発です。好きな古典を選んだら、まず半紙練習です。出品者の中に中央展で作品を発表し、入賞・入選の経験のある方もいます。

古典を学んで、それを手がかりとして半切に書きます。二行書き、三行書きが多かったようです。うまく書き上げたら、墨の多い部分や少ない部分（潤濁）を表現します。次は書き入れた字句の中に、大きな字、小さな字を入れて、行の流れのリズムを作ってみましょう。さらに、何枚も書いたら、次は自分の気持ちを作品の中に取り入れるのです。強い作品に、穏やかな作品にというように、筆先に自分の心を入れてください。こうなればもう作品です。古典の味わいを汲む作品の出来上がりです。特にこのような変化を持つ作品は、今回の作品の中にも多く見受けられました。展覧会場でよく鑑賞して、次回のヒントにしてください。

よい作品は見る人の心にも感動を与えてくれるはずです。次回の出品をお待ちしています。

【 かな作品 】

清水 透石（しみず とうせき）

日展評議員 読売書法会常任理事 全日本書道連盟副理事長 全国書美術振興会理事

長い歴史を持つ「日本の書展」が古典の学書を重視し、「公募臨書」部門を新設し、今年3回目となる。かな応募者数は前回より50点増加し、総点数230点、その中から117点が入選し、展示されることとなった。

今回も前回と同じく、師田久子先生と審査に臨んだ。審査を終えて感じたことを列記し、今回応募された皆さんや、次回応募される皆さんの参考になればと願っている。

① 応募者が選んだ題材と作品形式

入選者が選んだ古筆の傾向が変わりつつあると感じた。選んだ上位古筆は[関戸古今 33、小島切 11、寸松庵 9、高野切 I・香紙切 8、本阿弥・元永 7、高野切 III・和漢朗詠 5]、それに続いて中務・蓬萊・曼殊院など20種であった。形態別では原寸臨書が多く、拡大臨書（大字作品25点）は2割であった。原寸臨書は原典に近い料紙を選び、多習し、量的にも手抜きせず多く書いた者の作品が選ばれた。拡大臨書は、原典を十分咀嚼した上でないと難しく、応募者から敬遠されたのであろうが、今後の作品づくりに役立つので意欲的に挑戦していただきたい。

② 応募者の範囲

応募範囲は「日本の書展」本展への出品会派・書塾・カルチャー・個人などで、年齢層では熟年応募者も多く、幅広い層から応募されていた。

③ 感想と希望

原寸臨書は、半切に貼った卷子・帖の机上展示形式を、拡大臨書は短歌一首を軸装にというのが鑑賞者からも見やすいし、展示効果からいって良いかと思う。次回展は、漢字作品と同じような拡大臨書も、また学生を含め若い世代からの積極的な応募を期待したい。学書においては常に基本に立ち返り、古筆の臨書は欠かせないものである。書の基本を学書するのに最適な公募展、ふるってご参加を。

【 篆刻作品 】

内藤 富卿（ないとう ふけい）

日展会員 読売書法会常任理事 謙慎書道会常任理事 全日本書道連盟評議員
全日本篆刻連盟会長 全国書美術振興会理事

今年の篆刻の部は、残念ながら出品数が減少した。従って入選数も減少し、14点の狭き門になってしまった。減少した数だけ審査鑑別に当たっては非常に苦勞することになった。

出品者の熱意や努力が伝わってきて、陳列されなかった作品との差がなく苦心した。鈴印は大事な表現力、練習を重ねてほしい。

模刻の対象としては、優れた作品を選択できる鑑賞眼を養い、身に付けることがベスト。

今展の特出すべきは、江戸以来の文墨趣味により盛んになった日本篆刻界の第一人者である河井荃廬先生の模刻が多数見受けられたことである。鋭い感覚を養うことができる。

以後も、篆刻の古典の真髓に近づくためには、古印、明清の名家の印を模刻して親しみ、自身の好きな印を見つけ、心掛けとしては、古印や一人の名家を絞り込んで学ぶことがよい。次回には多くの公募出品を期待する。